

## 「2050年の食卓の姿」ビジョン ～SF思考による～

農林水産省 フードテック官民協議会 2050年の食卓の姿ワーキングチーム

ビジョン策定の経緯について

「2050年の食卓の姿ワーキングチーム」は、農林水産省フードテック官民協議会の下に、令和二年十月に設置されました。ワーキングチームメンバーは、官民協議会会員のうち、希望された方で、令和三年度は、百四十二名が登録されています。ワーキングチームの目的は、生活スタイルの変化や食料供給の課題、技術動向等に関する議論を踏まえ、

- ① 2050年の食卓のあり方や、その実現に向けて取り組むべき事項を整理し、
- ② 豊かで・健康的で・持続的な将来の食卓を実現するための「ビジョンを作成して、広く発信していくこと、です。

令和三年度の活動として、フードテックのビジョンを作成するため、SF思考という手法を用いてメンバー参加型でのビジョン作成をいたしました。制作過程を通じて、参加者間の「こんな未来があっても良い」、「こんな未来にしたい」、「もっと違う未来もある」といった議論はとても活性化しました。「現況から考えると、未来はきつとこうなる」と予測する手法ではありませんので、「本当にそんなことがあり得るのか?」と思われるところがあると思います。一方で、三十年前に、現在が予想できていたのか、と考えれば、未来は予想の範囲に収まることはないのが現実でもあります。

この小説を読んでくださった方が、「食卓の未来」に想いを巡らせ、仲間と共有するきっかけとしていただければ幸いです。

本活動は、農林水産省「令和三年度フードテックの推進に係る調査委託事業」により、SF作家、イラストレーター、SF思考専門家の支援を受けました。

小説の制作にあたっては、ワーキングチームメンバー、十名のタスクフォースメンバーにご協力をいただきました。多くの皆さまの自由闊達な思考、議論に敬意を表し、ご協力に感謝申し上げます。

※掲載されている小説の著作権は、作家に帰属します。

## 第一話 山のくらし

松崎 有理

わたしは木。天を見あげてまっすぐ伸びる杉の木。夜が明ける、また新しい一日がはじまる。朝日が差す。わたしはゆたかな太陽の恵みをあびて光合成をはじめめる。

体温があがる、脈拍が早くなる。そこで芸術家は夢から覚めて目をあけた。左手をあげ、手首のウェアラブルデバイスに語りかける。「おねがいモラヴェック。いま何時か教えて」「午前八時です。予定どおりのお目覚めです」デバイスが中性的な声で応えた。「体温は三六・九度、血糖値は九九。血圧は上が一二、下が七三。二十一歳女性として理想的な健康状態ですよ」

「あ、そう」芸術家はベッドから降りて身支度をはじめた。パジャマから藍染デニムの作業着に着替えるとき、腹部に貼ったミールパッチを取り替える。経皮吸収型製剤の食分野への応用品で、当初は宇宙飛行士むけに開発された。現在では災害救助から介護まで口から食べにくい状況で幅広く活用されている。ビタミンやミネラルなどの補食型も人気だが、彼女がつかうのは全栄養型だ。

かなり助かってるけど、貼り替えの手間があるからなあ。ああ、光合成できるようになりたい。

裸足で床を踏みつつアトリエへ移動する。十月の高尾山のひんやりした朝でも、無垢板の床は足裏にぬくもりを伝えてくる。まるで木に体温があるみたいだ。

アトリエは板の間を一段おりた土間である。

北側の大きな窓を背景に、昨夜ようやく仕上がった作品がたたずんでいた。人体に似ているが、胴部に大きな穴があいて窓の外の風景がみえる。顔には目鼻こそあれ口がない。素材はこの山から切り出してきた杉だった。

杉材はやわらかすぎて彫刻に向かない。だが地元の素材を利用するのが彼女の創作姿勢だ。

作品タイトルは「わたしには口がない、それでもわたしは叫ぶ VIII」。食べない自由を表現している。食事なんてめんどろ。そんな時間があつたら一分一秒でも長く作品に触れていたい。

さて、完成の感慨にひたるのもこのくらいにして。準備をはじめなきゃ。

今日は土曜日。午後一時から南青山のギャラリーで「食」をテーマとした立体作品のグループ展がはじまる。だから昼までには作品を搬入せねばならない。完成時の高さはル・コル

ビュジェのモデュロールに倣<sup>なま</sup>って一八三センチだが、伝統的な木組の技法をつかつており、六つのパーツに分解できる。

分解作業が終わるころ、左手首のモラヴェックが振動した。「お仕事中すみません。緊急事態です」

「なに」芸術家は額の汗を軍手でぬぐってから木槌を土間に置く。「地震警報なの」

「ちがいます。ドローン障害です。現在、東京上空のコンディションは安全飛行閾値を下回っています。原因究明中、復旧未定」

耳を疑った。「なにそれ。どういうこと」芸術家は大きな窓からみえる空に目をやる。「天氣のせい、じゃないよね」ドローンが飛べないのは大型台風がきているときくらいだ。天気予報とあわせて配送障害予測情報が通知されるのでこれまで困った経験はない。

「つて、ことは」いやな予感がした。「予約ずみのドローン配送機、こられないんじゃ」

「そのとおりです。残念ながら」

「ちえ、間が悪いなあ」芸術家は頭を振った。しかたない、自分で届けるか。「おねがいモラヴェック、エアタクシーを呼んで」

「残念ですが、同じ理由でタクシーも飛べません」

「うひゃあ、どうしよう」残る手段は陸運だが、最寄り駅までは四キロ以上ある。作品を抱えて歩き通せる距離ではない。

考えるときの常として腕を組み、土間をぐるぐる歩き回る。すると、三年前にこの古民家を借りたとき家主がいった台詞を思い出した。倉庫のものは自由につかつていいですよ。たしか、なんか乗り物なかったっけ。

倉庫の隅にうち捨てられていた電動バギーはひどく古い型だった。電源は入ったものの、モラヴェックとつないでコマンドを出すこともできない。

「直接、音声入力するタイプのようですよ」

「そんなのつかうの、はじめてだなあ」梱包した作品をバギー後部の荷台にしっかりとくりつけてから命じる。「高尾山口駅まで。壊れものを積んでいるから慎重運転モード」

ふたつのヘッドライトが点った。片側がウインクのように点滅する。「がってんだ、まかせてくれ。さあ乗んな」

一抹の不安がよぎる。なんなの、この言葉づかい。

ほどなく不安は的中した。野鳥の声が響くのどかな山道を下っている途中、バギーは。

「あ、エネルギーが」とつぶやいて完全にエンジンを止めてしまった。目を閉じるようにへ

ツドライトが消える。

「ちょっと、なに。こんなところでバッテリー切れなの」

座席の前についたコントロールモニタを両手でばんばん叩くがもちろん効果はない。

「歩きましようよ。残り二キロ弱です、じゅうぶん間に合いますよ」

モラヴェックの意見に従うしかない。荷物を肩にかつぎあげる。なんとか運べそうだ、杉が軽い木材でよかった。

「あんたも手伝ってよ」

「むりです。かわりに駅までの道案内はいたします」

最初のうちこそ軽口が出たが、しだいに荷の重みが肩に食いこんできた。背中が痛みだす。全身に汗がにじむ。ときおり、荷物を下ろして休憩する。空を見あげる。みごとに秋晴れだ。あぁなんて広びろとした空、生まれ育った都心とはぜんぜんちがう。やっぱり制作の場に山を選んでよかったな。

一瞬、光が遮られた。頭上をなにかが舞っている。

目をこらした。蝶だ。黒でふちどられたうすあおい大きな翅をゆったりはばたかせながら、長い列をつくって飛びすぎていく。まるで空中に道があるかのように。

へええ、美しいな。いいものみた。

青い蝶の行列は何頭いるのかわからないほど途ぎれなくつづいていた。しばし観察し、その映像を心の記憶庫にしまいこんでから、芸術家は出展作品をまたかつぎあげた。

都心へのリニア急行は渋谷が終点で、そこから地下鉄に乗りかえるつもりだ。顔認証改札を通って乗車し、空いた席をさがす。あった。「やれやれ」小声でつぶやくと、光抗菌シートに腰を下ろして作品をすっかり前で抱えた。あとは寝ていたっていい。体の力を抜き、両目を閉じる。安心感からうつらうつらしはじめた。意識が溶けていく。ああいい気持ち。

だがほどなく眠りは破られた。「ひさしぶりね。元気そうでよかった」

ぎょっとして顔をあげる。右側の座席にいつのまにか、母が座っていた。紺のスーツを着て大きな風呂敷包みを膝に載せている。いつもの出張帰りのスタイルだ。風呂敷は近年みなおされていた。布いちまいというシンプルさゆえ多様な用途に対応できるからだ。

芸術家は言葉が出なかった。しまった、出かけるときあわててたから、モラヴェックの「会拒」モードをオンにしておくの忘れてた。

会拒とは、ひととつながらない自由を保証するシステムである。移動時に集中したいビジネスパーソンや、孤独をだいじにするクリエイターらに好まれている。彼女の場合、特定の

人間だけを避けるよう設定していた。

モラヴェックのやつ、会拒オフだっていつてくれればいいのに。気が利かない。

「そうだ、これあげる」母は風呂敷包みに手を入れる。三年ぶりにみる母も元氣そうだった。でもすこし白髪が増えたかな、抗老化処置とか興味ないひとだから。

「はい、出張土産」箱を手渡してきた。パッケージデザインに芸術家の目はくぎづけになった。素朴なようでするどい独特のタッチはあの有名木版画家のものではないのか。包装のRペーパーも和紙の質感をうまく再現している。発色もいい。

「あ、新宿。じゃあね、元気でね」芸術家がパッケージを鑑賞しているうちに、母は乗り換えのため席を立てて電車を降りていった。正味数分の再会であった。

でもこれ中身、お菓子でしょ。食べたくなかないのに。あの押しつけがましさはあいかわらずか。

箱を裏返す。商品説明が印字されていた。砂糖、卵、寒天のみを使用したくちどけのよい伝統菓子です。

ふうん。マシユマロに似てるかも。

意識がふと過去へ飛んだ。きよくたんに食の細い子どもであったころ、唯一いやがらずに食べられたのは、噛む必要のまったくない菓子だった。

芸術家は菓子箱を作品といっしょに抱えこんだ。リニア急行は静かに、なめらかに乗客たちを終点の渋谷へ運んでいく。

南青山に着いたのは十一時四十五分だった。

ギャラリーでは他の出展作家たちが展示作業にいそしんでいた。半分くらいはどうみても作業着姿で、残り半分は個性的な私服である。自作を置くスペースとして与えられた一角で荷解きをはじめると、となりの区画から知人の塑像作家が声をかけてきた。

「お、ぎりぎり間に合ったね。そっちもドローン障害だったの」彼女の作業着は甚兵衛だ。頭は手ぬぐいで覆っており、足下は足袋に草鞋である。和装も、気候風土に合った衣類としてみなおされていた。「なんかさ、蝶のせいだったらしいよ。意外なところが脆弱なんだね、ドローンって」

あれか。芸術家の脳内でうすあおい翅のひらめきが再生された。「そういえばみたよ、蝶の群れ。すっごいきれいだった」

「あたしも見た。きれいだったし許してやるかね」ふたりの芸術家はうなずきあう。

床に置いた菓子箱に塑像作家が目をつけた。

「あつそのパッケージ、棟方志功デザインじゃん。みせてみせて」と拾いあげる。「ふんふん、卵をつかった伝統菓子ね。おいしそうだなあ、開けていい」彼女は無類の食いしん坊である。

「どうぞ」開梱した木像パーツを組みあげはじめる。

Rペーパー包装は塑像作家の短く切り詰めた爪でもかたんに開けられた。しばしのち。「やあ、これ。おいしいよ。食べてみなよ」

「えっ」と振り返ったその口に、有無をいわさず菓子が押しこまれた。表皮は固く感じたがそれも一瞬で、舌に触れたとたん窓につく霜のごとく溶けていった。残ったのはふんわりした卵のかおりとやさしい甘み。

マシユマロとはぜんぜんちがうけど、やっぱり嚙まなくていい。喉を通っていく感触もほとんどない。

卵が入ってるから、家への土産には不向きだ。それに、買ったからってわたせるとは限らないのに。まさか、毎回。

胸の奥で固く凍ったなにかが溶けていった。組みあがった自作をみあげる。顔。あの顔、こうして見るとなにか気になる。なにかが足りない。

念のため持参してきた道具袋を出す。三角鑿<sup>のみ</sup>を選ぶ。手を伸ばし、木像の鼻の下へ刃をあてる。位置ぎめする。角度をきめる。そして。

「えいっ」

一刀のもとに、下へふくらんだゆるい弧が刻まれた。木くずが足下へはらりと落ちる。一歩さがって出来ばえを確認した。うん、アドリブにしては上出来。これで欠如は満たされた。

台座にかがみこむ。指紋認証でキャプションボードのロックを解除する。「作品名変更」

『わたしには口がない、それでもわたしは叫ぶ VIII』から『口の発見 I』へ」

矩形のボードは二回点滅し、新しい作品名を表示した。

台座の上では木像がほほえんでいる。

「あれっ、今回は非食モチーフじゃないんだ。どういう心境の変化なの」

グループ展の主催者は目をまるくして木彫作品とそのタイトルを交互にみた。彼の右手のシャンパングラスには泡のたつ液体が入っている。見ているうちにピンクから黄色、紫へとゆっくり色を変えていく。

「いえ、べつに」芸術家はあいまいに笑う。彼女のほうはグラスも皿も持っていない。

初日の夕刻はオープニングレセプションである。食テーマの作品展とあってギャラリー

内には3Dフードプリンタとオートシェフが一台ずつ運びこまれていた。内蔵AIがレシピデータベースにアクセスしてどんな細かい注文にも応えてくれる。だからここではビীগンも宗教上の戒律を守りたいひととアレルギー持ちも糖尿病患者もいっしょに飲食できる。近ごろ話題のオートバーテンダーもいて、客のオーダーをききながら笑顔を振りまいていた。腕二本のみのオートシェフとちがって歩行もできる。

「ところで食材の搬入、間に合ってよかったですね」ドローン障害はさきほど解消されたらしい。

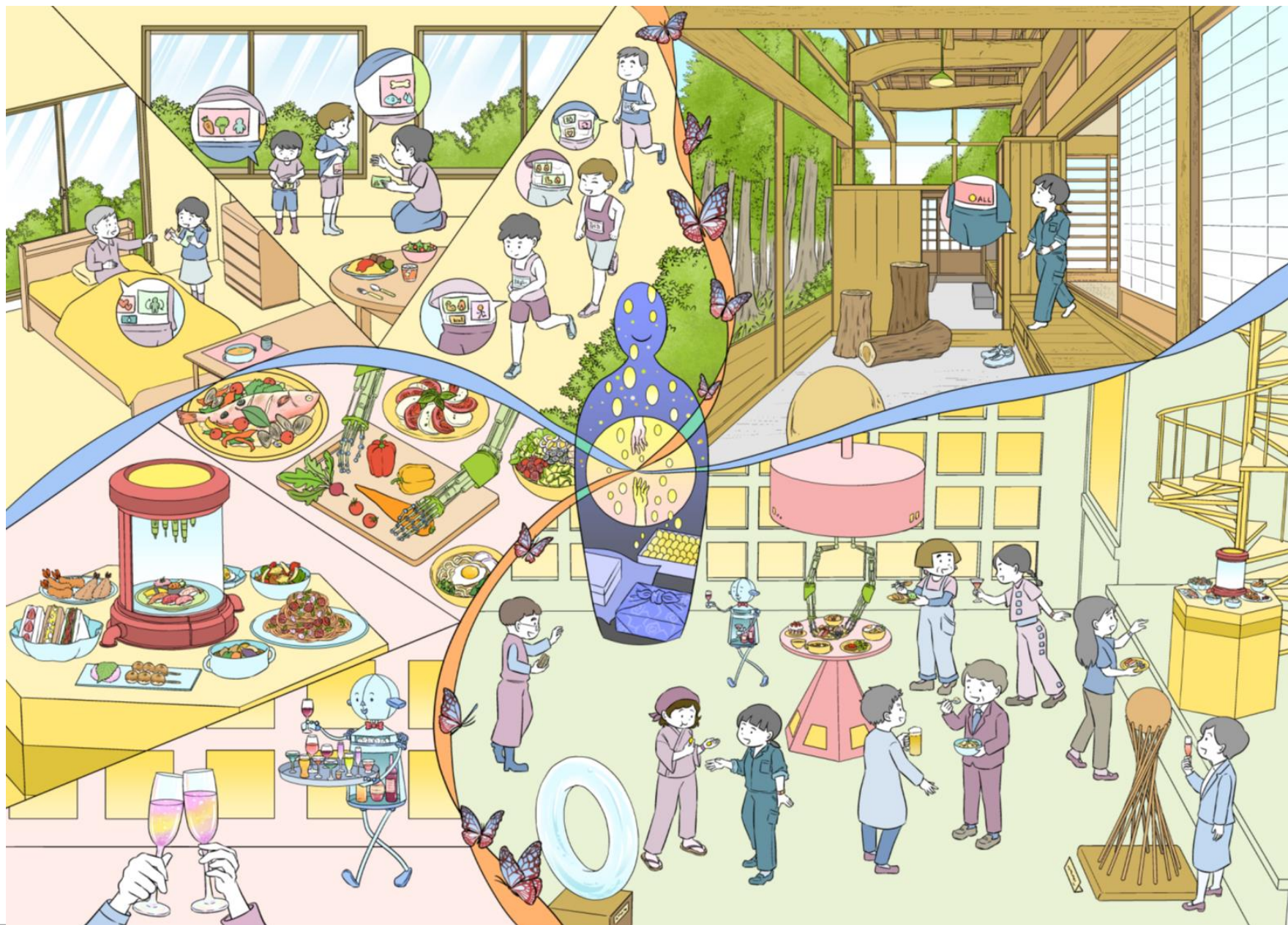
「ひやひやしたよ。あやうく非食レセプションになるところだった」楽しんでね、と言い残して主催者が去ってから、芸術家は会場を見回した。作家たちは自作の横で客に解説をしている。ええ、買い出しという過去の風習をあつかった作品です。信じられますか、数十年前は人間がわざわざ店舗に出向いて、食品をまとめ買いて家まで持ち帰っていたんですよ。「ええっ、なにそれ。重そう。時間かかりそう。めんどくさそう」VR参加の客のホログラムが驚きの表情をみせる。「そのころ生まれてなくてよかったあ」

近くに客がいないのを確認してから、芸術家は左手首に口をよせた。「おねがいモラヴェック。実家にホログラム通話」

「え、いいんですか。会拒対象ですよね」デバイスはとぼけた調子で確認してくる。こんなところはほんと、人間くさい。

「いいから、つないで」接続を待たないで深呼吸する。なにを話そうか。いまグループ展に最新作を出してるの。うん、青山だから近いよね。それから、それから。

「接続しました」モラヴェックがいった。芸術家はもういちど深く息を吸う。口角が自然とあがった。(了)



## 第二話 街のくらし

松崎 有理

「むむむ。いったいなにが悪かったのかなあ」

アキオはリビングの白い壁に映し出されたデータをみつめてため息をついた。「コオロギを育てて食べよう」プログラムの給食ロスへの影響評価だ。対照群とくらべ、残された給食の量に有意な差は出なかった。

「コオロギを食べられない子もいるからではないでしょうか」左手首のウェアラブルデバイスが、データを壁に投影しながら意見を述べる。

「知ってるよ、そんなの。うちの長男だって節足動物アレルギーだ」たとえばエビフライは、彼のぶんだけゲノム編集アレルギーン除去エビをつかうよう自宅のオートシェフAIにプログラムしている。長男は卵、小麦、牛乳にもアレルギーがあるため、AIにはほんとうに助けられていた。「だけど食アレルギー持ちは全人口の〇・一パーセント以下だし。それに食べられなくても、育てて調理するところまでは参加できるし」

「じゃあ、なぜなんでしょう」

こうやってモラヴェックが合いの手を入れてくれるのはうれしい。ひとりで黙考するより仕事が進む。「うーん。足りないのはインパクト、かなあ」アキオは回転椅子の背もたれに体をあずけた。思考が過去へ飛ぶ。数十年前、まだ平成の時代。小学校ではニワトリをつかった食育プログラムが行われていた。まず、有精卵を孵卵器に入れる。まいにち転卵し、三週間たつとふわふわのひよこが孵る。交代で餌をやり、とさかが出てくるまで育てる。名前もつけて、クラスの人気者だ。それでもさいごは屠殺せねばならない。調理実習室で水炊きを食べながら全員が泣いていた。シンプルな塩味の水炊きは記憶にしみこむうまさだった。衝撃的だった、命をいただくとはこういう意味なのか。

あの体験がアキオを食育アドバイザーという現在の仕事にみちびいたのかもしれない。食関連分野はAIに代替されにくい職業である。ものを食べることは人間にしかできないからだ。

とつぜん、モラヴェックが警告音を鳴らした。「お仕事中すみません。緊急事態です」

「なに」アキオは体を起こした。「地震警報か」

「いいえ、ドローン障害です。現在、東京上空のコンディションは安全飛行閾値を下回っています。原因究明中、復旧未定」

「なんだと」リビングの窓をみた。天気の良いではない。マンションの十五階からみえる秋

の空は、ほかの高層ビルによって切りとられてはいるものの、皮肉なほどに晴れていた。だいいち、悪天候が予想されるときは事前に通知がくるはずだ。

いったいなにが起きたのか。

リビング中央に浮く全方位時計をみる。どの方向からでも時刻が読めるすぐれもので、おとしの誕生日に妻からプレゼントされた。十一時半だ。今日は土曜日、もうじき息子たちが腹を減らして帰ってくる。昼食用の食材は届いただろうか。

「おねがいモラヴェック。マンションのドローンポートを確認」

デバイスは〇・五秒で答えを返した。「未配送」

「な、なんだってえ」アキオは椅子を蹴って立ちあがった。食事ができていないときの騒動を考えると頭が痛い。長男は中二で次男は小五、育ち盛り食べ盛りだ。男の子がふたりいるのは楽しくもあるがなかなかにめんどうでもある。

まてまて、落ちつけ自分。「おねがいモラヴェック。食品の在庫を確認」

デバイスのランプが点滅する。オートシェフ内蔵AIと通信しているのである。一秒後。

「宇治伝統深蒸し煎茶、約一八〇グラム。鹿児島酒造組合認証薩摩焼酎、約四〇〇ミリリットル。一子相伝ぼるとがる製法金平糖、ひと袋」

「嗜好品ばかりだな」これらは妻の出張土産である。

「申しわけありません。本日まで奥さまがお出かけですので食材の購入量を抑えていました。今朝の食べ残しはもうコンポストに」

「手詰まりか」アキオは肩を落とした。

「だから、3Dフードプリンタを導入しようとして申しあげたのです。粉末カートリッジは常温保存がききます。こんなときに便利です」

「こんなときって、いままで一度もなかっただろ。それにわが家はフープリをつかわない主義だ」アキオも妻も食の専門家だ。新鮮な食材から料理ができあがっていくようすを子どもたちに見せたいがゆえの選択だった。オートシェフであればしなやかな機械の両腕が熟練した料理人さながらに調理器具を操って材料を切り、叩き、すりおろし、かきまぜ、調味料を加え、焼いたり蒸したり揚げたりしたあと皿を選んで盛りつけるところまで実演してくれる。もし自宅のキッチンにフープリしかなかったら、食の過程はブラックボックスになってしまう。

そうこうするうち。「ただいまあ、お腹へった。でもまずシャワー」

玄関の虹彩認証ロックを解除して長男が入ってきた。スポーツバッグを投げ出すとバスルームへ直行する。午前中はバスケット部の練習だった。ポジションはパワーフォワード、プロ

選手になるのが夢だという。最近はぐんぐん背が伸びているので彼の食事だけは一日三五〇〇キロカロリーに設定している。加えて各種のアレルギーにも対応せねばならない。

つづいて。「ただいまあ、お腹へった」次男の帰宅である。公立小学校での土曜半日授業もすっかり定着した。ランドセルをリビングのソファへ放ると期待をこめた目で振り返る。「お昼、なに」食いしん坊なのだった。

「すぐ食べるなら金平糖があるぞ」

「やーだ。ピンクだから」食いしん坊のくせに偏食家だ。桃色をした食品を徹底的に避ける。しかも将来は食レポタレントになりたいらしい。矛盾に満ちているが小学生男子とはそんなものだ。とにかく、ベーシックインカムをもらいつつ気楽に生きたい、などとさめた口調でいわれるよりはいい。

長男のアレルギーはもうじきテクノロジーが解決してくれそうだった。次男の偏食は、わがままではあるが夫婦とも気にしないことにしている。長じるにつれ治るだろう。あまり追いつめてはいけない、追いつめては。

ハーフパンツとTシャツ姿の長男がタオルで頭をふきながらリビングに入ってきた。「お父さん。お昼、なに」

アキオは二秒ほど黙ってから事情を話した。だが説明が半分もすまないうちに。

「ええええっ。なにそれ」「うそ。信じらんない」「じゃ、お昼ごはん食べられないってこと」

「腹へったよ。死んじゃう死んじゃう死んじゃう」「なーにーかー食わせろー。ピンクじゃないやつ」

予想をはるかに超える大騒ぎとなった。アキオは耳を両手でふさぎながら。「わかったわかった、なんとかしよう。デリバリーをたのむってのは、どうだ」なじみの店の名をあげた。おいしいだけでなく、きめこまかなアレルギー対応もしてくれる。

「やったあ。あそこのバインミーだいすき」次男は無邪気によるこんだが、長男は首をかしげた。

「ドローン飛ばないんだよね。デリバリーも無理じゃないの」

「あっ」あわててモラヴェックを通じて確認する。案のじよう。

「ランチタイムのデリバリーは受付停止中」という答えだった。

あの店なら歩いていけるな。「それじゃ、テイクアウトするか」

「テイクアウトは受付終了だそうです」

「それ、売り切れってこと。早すぎるよ」次男が声をはりあげる。

アキオはキッチンに視線を走らせた。「うちといっしょで、どの家もろくに食材を備蓄し

てないんだろ。だからみんな、昼食はテイクアウトにしようと考えたんだ」

こんな盲点があったとは。

ドローンと自動運転の組み合わせによる配送インフラの発達は家庭での食品備蓄を廃れさせた。フープリやオートシェフの登場も手伝って、食はいつでも手に入るというイメージが醸成された。昨今のスマートマンシヨンの多くは収納をもたない。

もちろん行政は備蓄をしているがあくまで災害用だ。ランチがわりに利用できるわけではない。

「こんなとき昔はどうしてたの。お父さんが小さいころドローン宅配ってなかったでしょ」

長男に質問されてようやく思いついた。「よし。買い物に出かけよう」

「買い物。出かける」次男がさも不思議そうにふたつの言葉を並べて口にした。

モラヴェック経由でオートシェフAIに買い物リストをつくってもらい、息子二人をつれてマンシヨンを出た。

いちばん近いスーパーはエンタメ型店舗だった。歴史食レストランを併設しており、週替わりでさまざまな時代や文化の再現料理を提供する。先週はポンペイ、その前はアステカだった。雰囲気のある衣装を貸してくれるし食事中的動画撮影サービスもある。気に入った料理のフープリ用レシピも購入できる。

街に点在するスーパーは配送拠点にもなっていた。自動運転トラックにより新鮮な食材が搬入され、近隣家庭から注文がくるとドローンが個別配達するしくみだ。

だからなにかは手に入るだろうと思っていた。だがその期待は、スーパーへの最後の曲がり角を曲がったときに打ち砕かれた。

まるで平成の時代のような行列ができている。長い。なんども折り返して店の前の歩道をすっかり埋めている。なんと、人間のスタッフがふたりも出て客たちの整理にあたっていた。そのうちのひとりをつかまえて質問する。「どのくらい待たなきゃいけませんか」するとスタッフは。「たいへん申しわけございません。じつはすでに在庫が尽きかけておりまして、いまからお並びいただいてもご購入できませんとお声がけしているところですので」

すみませんお役に立てず申しわけありませんと頭をさげるスタッフを残して、アキオ一家はスーパーから離れた。謝罪はAIで代替不可能な数すくない仕事のひとつであった。

「ねえ。お腹へった」次男がアキオの手をぎゅっと握る。

「ほかへ行こう。つぎに近いのは、おまえの好きなフィクションレストランがついてるスー

「バーだぞ」映画やゲームに出てくる料理を再現してくれるので子どもたちはもちろん大人にも大人気だ。

左手首のデバイスが光った。「僭越ながら。原因がドローン配送障害なのですから、ほかのスーパーでも同じ状況かと」

「そんなの、行ってみなきゃわからない」

だがアキオの希望はまたも打ち砕かれた。またも人間のスタッフからていねいに謝罪された。とはいえ謝罪で腹はふくれない。

エンタメ型だけでなく植物工場や養魚場を備えた生産型店舗もあたってみた。どのスーパーもさいしょの店と同じだった。それどころか時間が経つにつれ状況は悪化していき、在庫切れを理由に一時閉店する店さえ出はじめた。

必要以上に買い占めているとしか思えない。ほかのひとのために少しは我慢したらどうなんだ。

「おなか、へった、よお」

次男の声はすっかり元気をなくしていた。アキオの右手を握る力も心なしに弱い。気づけば秋の日は傾きはじめている。アキオはひどい敗北感にうちのめされながら息子たちを連れてとぼとぼと家路についた。子どもの期待に応えられない自分がひどくみじめだった。だいいち、空腹ってこんなに辛かったっけ。すっかり忘れていた。

これほど気落ちするのはひさしぶりだ。前回は、忘れもしない三年前。あの子が家を出ていった日だ。

おれたち夫婦にとってはじめての子だった。気負いすぎて、追いつめてしまった。

長男はアキオの左どなりを歩きながら自分のモラヴェックと会話していた。しばしのち立ち止まって空を指した。「お父さん。あれ、みて」

「なに」アキオはまっすぐ上をみあげた。そして息を呑んだ。

暮れなずむ空を背景に、西からの日差しを受けて、なにかがふわふわと漂いながら輝いていた。最初は、光る川が空中を流れているのかと思った。だが目をこらすとわかった、蝶の群れだ。うすあおい翅が夕陽に透けて美しい。

「あれがドローン障害の原因らしいよ。アサギマダラ、って名前だって。大型の蝶で、渡り鳥みたいに群れで移動する習性がある。今日、すごく大きな群れが東京都の上空を西へ進んでいるみたい」

西か。高尾山のある方角だ。「鳥類対策は、ドローン配送サービスがはじまったところ徹底的にやってたがな。虫の大群は盲点だったわけか」

「きれい」半べそだった次男も蝶の乱舞にみとれている。

めずらしくて美しい光景をみた。しかし空腹がいやされたわけではない。

「ただいま」父子三人がふらふらした足どりでマンションへ帰ってみると。

「おかえり。遅かったね」出張中の妻がすでに帰宅していた。スーツを部屋着に替え、メイクも落としている。

「いやその、ドローン障害でな」状況を試みじかに説明する。「そっちも、エアタクシー飛ばなくて大変だったんじゃないか」

「いえいえ、電車つかったから。それと障害はもう解消されたって」妻は大きな風呂敷包みをリビングのテーブルに持ちあげた。息子ふたりがわあっと歓声をあげる。「なになに、おみやげ。なに」目を輝かせて風呂敷を解きにかかる。

「そうそう。電車に乗ったおかげでね、めずらしいひとに会っちゃった」

「めずらしいって、まさか」

「なんの気まぐれか会拒を解除してたの。大きな荷物抱えてたから展覧会かな。あの子ったらおしゃれもせずに作業着姿で。あの子らしいけど」妻は窓のむこうの夕焼けをみて少し笑う。オレンジ色の空にドローンの影が行き交っている。いつもの光景だ。「でね、お土産もわたせた」

アキオは笑みを返した。「やっただな。食べてくれるといいな」妻は出張のたび、家への土産とはべつの品をみつくるって買ってきていた。その努力がようやく実ろうとしている。妻は目を細めた。「箱のデザインには食いついてたよ、予想どおりに」

「ねえお母さん。これ、なあに」

長男がRペーパーの包装をとりのけていた。出てきたのは、木桶がふたつ。いや、桶というには浅い。指の幅二本ぶんほどしかない。

「ふふふ。じゃあ、開けてみましょうか」

息子たちは興味しんしんで母親の手つきに見入る。アキオもふたりの肩越しにのぞきこんだ。妻の仕事は伝統食ハンター。いまは国が主導する「伝統食カタログ化プロジェクト」に取りくんでいる。

丸い木のふたが取り除かれた。あざやかな緑の笹があらわれる。桶をひっくり返して笹に包まれた中身をふたに乗せ、ナイフでケーキのような放射状に切り分ける。

切り口をみてアキオは合点した。白い飯にあざやかな桜色の魚肉。「鱒寿司か」

「そう、押し寿司の一種。常温で持ち歩けるからお土産に最適」

切り分けがすむと笹をいちまいいちまい取り除く。鱒の身は白い酢飯の下になっているから、次男のきらいなピンクの色は目につきにくい。

「わあ、やったあ」

「おいしそう。いただきます」

「待って。ふたりとも手は洗ったの」

しあわせな家族だ、とアキオはあらためて妻子をながめる。ただひとつ、欠けたものがあるのだが。ひとつだけ。

四人が食卓をかこむ。楔形の押し寿司を舌に載せる、ああ脂ののった鱒のうまみとぎつりつまった飯の酸味。飢えた体にしみわたっていく。

「これ、すつごくおいしい。こんなおいしいの生まれてはじめて」次男が叫ぶ。

アキオの脳内でなにかがひらめいた。そうだ、これまでおれは食べることばかりに集中しすぎていた。逆に考えるんだ。食べない時間をあえて設けることで、食の大切さを子どもたちに伝えられないだろうか。忍耐力もつちかわれ、ゆくゆくは買い占め抑止につながるかも。食べないこと。非食、か。

そのとき。「お食事中すみません。ホログラム通話がかかっています。どうしますか」「ん。だれだ」デバイスに目を落とす。接続待機中のアドレス名をみて、思わず目尻が下がった。欠如はようやく埋まるらしい。(了)



「美はまた近くなりになり」

柴田 勝家

1.

更新、更新、また更新。

ドレッサーの鏡を何度なぞっても、そこに表示された自分のアカウントに変化はなし。わざわざ本名の「橘アサヒ」で登録しているのに、リアルの友人は誰も反応してくれない。もちろんフォロワーからの賞賛の声も、これ見よがしな嫉妬の声もない。評価数だけは百個を越えてるが、これは新着投稿にフォロワー同士で送るご祝儀のようなものだ。

だからランキングも変わらない。『Viewies』の美容コスメ部門では十位ギリギリ。これでも立派だと言ってくれる人もいるが、数ある美容系SNSの中の、さらに複数あるカテゴリの中の十位だ。総合カテゴリなら百位以下だし、ファッションや顔の綺麗さでは勝負もできない。

つい気になってランキングを見ると、総合カテゴリのトップにいる「ノゾミ」という名のアカウントがレコメンドされた。写真は首から下しか写していないというのに、ファッション部門と健康部門でランキング上位にいる。まるで住む世界が違う。きつとどこかの金持ちで、高級エステに通い、好きなだけ服を買い、デパコスをふんだんに使っているんだ。札束で殴られたら勝ち目がない。

開いていたウェブページを閉じ、改めて鏡を見る。化粧ノリも悪くないし、美容院で髪も整えてきた。筋肉だつて全身のフォームが崩れない程度には鍛えておいた。なら何がダメだったんだろう。眉間にシワを寄せつつ自分の顔をチェック。目の下にくまがあるけど、これは写真の加工で消してるから大丈夫。

でも、と思う。

もしかしたら、写真の加工越しても生活の乱れが伝わっているのかもしれない。だとしたら、もっと良い暮らしをしないといけない。でも無理だ。仕方ない。忙しいんだから。

振り返れば洋服とダンボール、飲みかけのペットボトルが散らばる部屋がある。写真を撮る時だけ、そんなゴミを足でどかしてスペースを作った。写真の中の私は、綺麗な世界で生きる優雅なアラサー男性だ。

「モデルさんとかやられてたんですか。アサヒさんみたいな人になりたいな」

ブックマークした感想コメントは何度も読み返している。だから覚えてしまった。

2.

家の近くにあるマッサージ店。全身もみほぐしで一時間三千円。最新設備も何もない、整骨院に毛が生えたような場所。これが私にとって安息の場所だ。

だというのに。

「むう、また負けてる」

ベッドにうつ伏せになったまま、スクロールをいじって『Viewies』のランキングをチェックする。今週も私の投稿は鳴かず飛ばずで、逆に例の「ノゾミ」はまたしても総合カテゴリーで一位。何気なく投稿を見てみれば、来週にはハワイに飛んでのワーケーションだという。つくづく住む世界が違うようだ。

「アサヒさん、眉間にシワ寄ってるよ」

施術を担当してくれる女の子がそんなことを言う。いけない、と思って眉を上げて表情筋をほぐしておく。こうした顔のコリは自分でなんとかできるが、体の疲れは他人に任せるしかない。

「その人、ノゾミさんですよね」

む、と思わず反応してしまう。彼女に『Viewies』を教えたのは私だけど、それでも「ノゾミ」をしっかりとチェックしていることに少し嫉妬する。

「ノゾミさんって、フローラモデルをしてるらしいです、よー！」

そこで聞き慣れない単語が飛び出してきたから、背中を伸ばされつつ尋ねてみる。

「腸内フローラを世界に公開してるんですよ。フローラオートドライブだったかな、腸内環境を最適な形に保ってくれて……、食生活や健康にも役立つ情報だとか。ノゾミさんの腸内フローラを真似たい、って人が大勢いるんですよ」

「それって、結局どうするの？」

「なんだったかな、健康な人の腸内環境を測定して、あとは△とかで環境が似てる人に食事とか、サプリをオススメするとか。牛乳飲むとお腹壊すような人が、これを利用すると牛乳飲めるようになった、みたいな」

なるほど、と思った。ようはスーパーモデルが使っている化粧品やサプリを一般人に勧めるようなものだ。憧れの人と同じ体になりたい、と思うことは万国共通だろう。

しかし、それが腸内フローラだというなら。

「でも、それって結局、排泄物の話でしょ？」

「まあ、排泄物の話になりますねえ」

話を聞きながら、スクロールで検索して関係する話題を調べていた。そもそも腸というの

は第二の脳とも言わべき重要な器官で、その環境が健康状態に直結するものらしい。それがフローラオートドライブという微小な機械を腸内に入れることで、自動的に悪玉菌と善玉菌のバランスを取ってくれて、心身ともに健康でいられる、とかなんとか。

さらにフローラモデルというのは、それこそスポーツ選手が脈拍や心拍数を見るように、自身の排泄物を定期的に測定して腸内環境をベストな状態に保っている人たちだそう。この人たちの腸内環境を参考にして、最新型のフローラオートドライブがどんどん更新されているとのこと。

フローラオートドライブを扱う企業に認められるほどに健康でいる。それは結構な努力だろうが、私の美意識にはないものだ。いくら内臓を綺麗にしたところで、他人がそれを評価してくれるだろうか。いや、でも。

「評価されてるんだよね、それが」

「何がです？」

私の独り言を聞き流してもらったところで、不意に隣のベッドとこちらを隔てるカーテンが引かれた。視線を送ると、一人の老年女性がベッドに寝そべった状態で私の方を見ていた。

「あ、ごめんなさい、うるさかったですか」

思わず私が謝ると、対する女性は歯を見せてニカと笑った。

「いや、全然。ただ、ちよつと腸内フローラの話してたからさ。私もやってるんだよ。だから気になってね」

朗らかに笑う女性は、それこそ白髪にシワの寄った顔が目立つが、背筋は通っているように見えた。あれで六十代の前半といったところだろうか。

「最近、引越してここに通い始めたんだ。アナタ、常連さん？」

「あ、はい、橘です」

「私は柳川。まだまだ元気な九十四才だ」

きゅっ、と思わず聞き返してしまいそうになった。とてもそうは見えない。

「フローラオートドライブってのはいいね、健康なウンコを出すのが大事なのさ」

柳川さんは大笑いして、それからずっとウンコという言葉を連呼していた。

3.

その翌週も、私はマッサージ店で柳川さんに会った。

「橘さん、先週ぶりだね。これお土産」

待合室で出会った柳川さんからマカデミアナッツのチョコを渡された。ただ私は、その中身よりも真っ直ぐ背を伸ばして立つ彼女の姿に見とれてしまっていた。パンツスタイルに赤いジャケット、足はスラリと伸びている。

「改めて見ると、柳川さんってお綺麗ですね」

「そうかな？ まあ、昔は舞台女優をやったのさ」

その日の会話はそれくらいで、お互い別々の時間にマッサージを受けて帰った。帰り道で私は二つのことを考える。一つ目は柳川さんみたいに綺麗に歳を取ることの凄さ。とてもじゃないけど真似できない。二つ目は『Viewies』で今週も「ノゾミ」にランキングで惨敗だったこと。

この二つをつなぐのは、やっぱり自分が綺麗になりたいという思いだ。

男なら筋肉で勝負をすればいい、という意見もある。もちろん部屋でできるくらいのトレーニングはしているけど、それだけでは意味がない。私は筋肉よりも肌や髪、自然なボディメイクの方に美しさを見出し、それに見合った化粧や美容食を用意してきた。色んなものを試してきた。それが一つ二つ増えたって、どうということはない。

だから私は、ついにフロラオートドライブのセットを購入してしまった。柳川さんもやっていて、さらに「ノゾミ」もやっているとなれば、腸内フロラを整えることが美につながるのだと安易に考えてしまった。

ついこの間、自分で馬鹿にしたばかりだ。スーパーモデルと同じサプリを飲めば自分も同じ存在になれる、なんて。でも、これだって仕方ない。出来ることは何だって試すしかない。そうしないと「ノゾミ」には勝てないんだから。

私は自宅に届いたフロラオートドライブのキットを開封する。中身はリストバンドと検便用の棒。それから微小な機械と腸内細菌と一緒に固めたサプリメント。こんなもので自分が本当に綺麗になれるのか。

私は期待と疑念を込めて、空になったダンボールを部屋に投げ捨てた。

4.

「なんだか、調子が悪そうだね」

マッサージ店で柳川さんが声をかけてきた。もう知り合いだからと、ベッド同士を仕切るカーテンは開かれている。

「最近、サプリを飲んでるんです。細菌サプリ」

「ダジャレ、じゃないか。フロラオートドライブ用のかい？」

「はい。後は、食事もヨーグルトとか、玄米とか、腸に良さそうなものばかりにしたんですけど。でも、ダメなんです。どれだけ計測しても腸内環境はよくならないし、肌荒れは凄いいし、もう『Viewies』の投稿も全然出来てないし……」

マッサージを受けながら、つい吐き出してしまった。柳川さんは心配そうにこちらを見ているが。こうなると止まらない。

「柳川さんは知らないかもしれませんが、『Viewies』っていう美容系SNSがあって、そこでノゾミっていう女性が人気なんです。その人もフロラオートドライブを使って、私、どうしてもその人に勝ちたくて……」

ここ最近、ずっと「ノゾミ」のことが脳裏にあった。もしかしたら柳川さんに出会ったのも関係しているのかもしれない。綺麗になろうとするほど、周囲の環境は遊んできて、汚れていく自分に焦ってしまい、またストレスが貯まる。完全な悪循環だ。わかつてはいる。

だから、柳川さんが私の悩みを快活に笑い飛ばしてくれたのは嬉しかった。

「そうだね、大事なものはバランスだよ。腸内環境はもちろん悪いといけないけど、良すぎてもいけないんだ。その人に合ったバランスがある。ちゃんと食事は取ってる？ ヨーグルトだけで済ませてないよね。そんな状態でサプリの飲みすぎも良くない」

「でも、このままだと、私」

「そうだな、そんなに気になるなら、フロラドネーションを受けたらどうだい？」  
今度も聞き覚えのない単語が出てきた。だから視線を上に向けていると、

「便移植だよ。相性の良い他人のウンコを体に入れるんだ」

と、柳川さんが身も蓋もない説明をしてくれた。

「そんな、汚くないですか？」

「汚いもんか。腸内環境が整った健康な人間の便だ。まあ、口からは勘弁だけどね」

柳川さんは可笑しそうに笑うが、つまり、それは口ではない箇所から排泄物を体に入れるというわけだ。この場合、該当の箇所は一つしかない。

「その顔を見ると、橘さんはまだ汚いと思ってるね」

「いや、まあ……」

「汚いっていうのは人間の感じ方さ。そういうのは大体、離れると汚く感じる」

「離れると汚い、ですか？」

私の問いかけに、柳川さんは少しだけ寂しそうな表情を作った。

「唾も、ゲロも小便可も、体の中にある時はなんとも思わない。でも、それが体から離れると汚いと思うんだ。なんでもそうさ。自分の部屋は汚いとは思わなくても、他人の部屋の汚れ

は気になる。親しい人間の欠点は美徳に感じられるし、嫌いなヤツが人気だと裏があると思う」

いくらか思い当たることもあり、私は柳川さんの言葉を静かに聞いていた。

「人が一番離れていると思うのは、きつと老いだろうね。なんといつても、生まれた瞬間からずっと離れていくんだ。どんどん古くなっていく」

その言葉は、柳川さんが自分自身に向けているようだった。これほど若々しくあっても、やはり意識せざるを得ないのだろう。

「でも、柳川さんは——」

だから、何か気の利いたことでも言おうと思った。

そんな瞬間に、突如として激しい腹痛に襲われた。脂汗が滲んでくる。近頃、ずっと突っ張っていたお腹が、ここで破裂してしまうのではないか。そんな恐怖がある。

「綺麗なままで」

なんとか一言を絞り出したところで、私の腹痛は耐え難いものとなった。

5.

結局、私は病院に運ばれ、いとも簡単に「便秘」という症状が告げられた。

腹痛は時間と共に治まったし、一応は薬ももらったから問題はない。ただし、根本的な解決には至らないということで、内科の先生は私に「フローラドネーション」を提案してきた。ここまで来ると運命じみしてくる。

内科医の先生から詳しく聞けば、フローラドネーションというのはフローラオートドライブの進化版、というか、より個人向けにカスタマイズされたものらしい。その人にとって相性の良い、理想的な腸内フローラを提供してもらうことで、腸内細菌のバランスを自動的に整えることができる。さらに機能自体はフローラモデルの人たちが使っているものと同じで、自身の腸内フローラを可視化して情報を送る。それによって、日々の状態に見合った食事をオススメしてくれたりもするらしい。

その答えを保留にしつつ、私は翌週もマッサージ店に行った。助けを呼んでくれたオーナ―とマッサージ師の女の子、そして柳川さんに御礼を伝えようと思ったからだ。

「やあ、橘さん」

しかし、当の柳川さんはニコニコと笑いながら「これ、お土産。パリの」と告げ、洒落たクッキーの缶詰を渡してきた。この人には敵わない、と思って、私は素直にフローラドネーションについて再び尋ねることにした。

「それじゃあ、橘さんは前向きに検討中、ってことかい」

「そうですね。今まで、ずっと外見ばかり気にしてたので、そろそろ内面も大事にしなきゃな、って」

「なにより。健康っていうのは体だけじゃなく、精神も含めてさ。内面ってのは臓物だけじゃなくて、心のことだよ。腸の環境が良けりゃ、不安になったりもしない。逆も然りで、イライラしてたら腹が痛くなる。そんなもんさ」

柳川さんの言葉が、今なら素直に受け取れる気がした。

ほんの一ヶ月ほどだが、あの『Viewies』に投稿しないようになって考え方が変わった。美容は大事なものが、知らないうちに中毒のようになっていた。柳川さんも腸内環境はバランスが大事だと言っていたが、のめり込み過ぎていたようだ。これからは自分なりのペースで投稿していくだろう。

「ところで」

そうした中で、ずっと気になっていたことを柳川さんに尋ねることにした。

「柳川さんって、フロラオートドライブについて詳しいのに『Viewies』の話とか、しませんでしたよね。あれで人気のノゾミもやってるのに」

「そりゃそうさ」

この日も、隣のベッドに並んで何気ない会話をする。そのつもりだった。

「自分のことを声高に言うのなんて、恥ずかしいじゃないか」

「ええ？」

思わず変な声を出してしまった。柳川さんは意地悪そうに笑って、私の方に携帯端末を向ける。その画面には「ノゾミ」のアカウントが表示されている。

「え、あれ、でも、その写真、すごい四十代くらいで」

「加工だよ。まあ、それも含めて美だってさ」

その流れで柳川さんはカバンから保険証を取り出して見せてくれる。名前は柳川望。一九五六年生まれの九十四才。

「さて、じゃあフロラドネーションの話だけど、どうだい、私のフロラを移植するってのは？」

「でも、いいんですか？」

「気にしないで、私たちは友達だからね」

そう言われると、なんだか不思議と受け入れられそうだった。どうやら私と柳川さんの距離は近くなっていたようで、汚いと感じることもないらしい。

「じゃ、二人で写真でも撮って投稿しようか」

久々に『Viewies』を更新すると、今までで一番多くの反響があった。でも、別に内容は気にしない。大事なのは写ってる私たちだ。それも外見でなく、その内側。

ドレッサーの鏡には、笑顔でピースサインを作る私とノゾミの画像が映っている。



## 「くらやみマンションS.O.S」

柴田 勝家

1.

これは僕が小学三年生の時の話だ。

その頃、僕の住むマンションで変な噂が流行ってた。それはマンションの中に「くらやみ階」という謎の空間があって、そこに住む「闇人(やみひと)」に見つかると異世界へと連れ去られる、っていう内容だ。

僕と、みつつん、フクロ。同じマンションに暮らす三人は、そんな噂をめぐって小さな事件に遭遇したんだ。

始まりは社会科の授業だった。「自分たちが食べるものについて調べよう」という課題が出された。班に分かれて、図書館で調べたり、近くのスーパーに話を聞きに行ったりするヤツだった。それで最後は大きな模造紙にマジックペンで研究成果を書き込んで、一週間後に発表。正直に言えば、少し面倒だった。

だって、その頃の僕らは野菜がどこで出来るか想像もしてなかったからだ。

「なあ、野菜ってどこで取れるの？ 山？」

そう言ったのは友達のみつつんで、彼は元気が取り柄のお調子者。

「ウチは宅配で届いてるよ」

これは友達のフクロ。おっとりしているが真面目で優しい。

「野菜は畑で取れるんだよ。逆に、お米が取れるのが田んぼだ」

「へえ、やっぱイサは物知りだな！」

みつつんの賞賛とフクロの拍手に、僕は自慢げに頷いてみせた。

「でも、畑なんて近くにないよね」

「だよな。父ちゃんが見てたテレビに映ってたけど、あれ遠くの山だったよ」

「とりあえず図書館で調べるのは？」

学校からの帰り道、僕の言葉を聞いたフクロが手帳を開く。中に入っている電子ペーパーを使って最寄りの図書館を検索中。先生は「紙の本を使って調べよう」なんて言ってたけど、その図書館に本が残ってるかどうかをネットで調べる必要がある。本末転倒だ。

「そもそもペーパーじゃない紙にマジックでどう書けばいいんだ？ ちゃちゃつとネットの素材使えばいいだろ」

「自分の手で書くことでレイアウトやデザインの勉強になるんだよ。先生が言ってたよ」  
みつつんのボヤキに僕が答えておく。一方、フクロは真剣な様子で「野菜」に関する本を探しているようだった。だけど、小学生向けの本はなかなか置いてないらしく、難しそうな畑の作り方みたいな本ばかりが出てきたらしい。

だから僕ら三人は悩むばかりだった。別の班が羨ましかった。肉や魚を選んだ同級生たちは、最初から図書館で済ませると言っていたし、先生もそれを認めていた。でも野菜を選んだ僕らには「近くの農家さんに聞きなさい」と言って、楽に終わらせることを許さなかった。それはどうやら、最初から図書館には「野菜」に関する情報が少ないという意味だったのかもしれない。

「これはきつと、陰謀だぞ」

三人でマンション前の公園で遊びつつ、みつつんがそんなことを言い出した。

「オレらさ、給食の野菜、ずっと残してただろ」

「残してたね」

「だから先生は、オレらにイジワルしてんだよ」

僕は先生が好きだったから「そんなことはない」と言いそうになった。だけど、すべり台の上から盛り上がる二人を見ていると、あり得るかも、という気持ちの方が勝ってきたから黙っていた。

「野菜のこと調べるのに、遠くに行けないしな」

みつつんが嘆いたところで、五時を報せるチャイムが聞こえてきた。夕暮れの公園に街灯が光り始めた。そろそろ家に帰ろうと、僕は二人に声をかけようとした。

でも、その時に不思議なものを見たんだ。

「あれ、変な光だ」

僕らの家がある十二階建てのマンション、その真ん中くらいでユラユラと光が揺れていた。それ以上に奇妙だったのは、変な光が消えたのと同時に、その階の全ての明かりが消えたことだ。上下の階には部屋の明かりがあるけど、まるごと一つの階が真っ暗なまま。

「くらやみ階だ」

最初にそう言ったのは、フクロだった。

2.

フクロには六年生のお姉ちゃんがいて、僕らもたまに一緒に遊んでもらうことがある。

「へえ、くらやみ階を見たんだ」

翌日、僕とみつつんはフクロの家に遊びに行つて、この間、夕方に見た変な階層のことを話し合っていた。フクロは「くらやみ階」という言葉をお姉ちゃんから聞いたというので、そのことを尋ねてみた。

「あれを見たら、もうダメだ。君たちは闇人に狙われてるよ」

フクロのお姉ちゃんは、ジュースを飲みながらそう告げてきた。

「闇人って、なんだ？」

「くらやみ階の住人だよ。この世界とは違う、暗闇の世界に住んでる。知ってる？ この世界にはね、色んな場所に暗闇の世界の入り口があるんだよ。それで午後五時になると、二つの世界が一瞬だけつながっちゃうんだ。そこに入ったら出てこれない」

そんなことを言うフクロのお姉ちゃんに対して、僕は最初に怯えて、次には「そんなの嘘だ！」と反発しなくなった。だから、みつつんはこんなことを言い出した。

「いいよ、くらやみ階を確かめてやるよ！」

ニヤニヤと笑うフクロのお姉ちゃんに見送られ、僕はマンション前の公園へと向かった。そこで自分たちの住んでるマンションを見上げても、昨日の夕方に見た「くらやみ階」らしきものは見当たらない。建物は同じ形の箱が積み重なっただけに見える。

「あ、見て！」

フクロがすべり台の上から叫んだ。時刻は午後五時だ。「くらやみ階」の現れるという瞬間。外が暗くなり、マンションの部屋の明かりが目立つ中、その階だけが真っ暗なままだった。

「イサ、何階か数えるぞ！」

「うん、えっと」

僕はマンションを下から数えた。ちょうど六階が「くらやみ階」になっていた。

それを確かめてから、僕は再びマンションへと戻り、エレベーターへと乗り込む。勢いのまま六階のボタンを押したけど、みつつんもフクロも怯えているようだった。僕も同じで、このままエレベーターが「くらやみ階」につながって、異世界へと入ってしまったらどうしよう、と思った。

しかし、そんなことにはならなかった。

「あれ、三井君。伊崎君と袋井君も一緒？」

僕らが六階に降り立った時、ちょうど買い物袋を持った女性と出会った。森長のおばさんだ。この人は六階に住んでいたはず。

「あ、あの！」

声を上げたのはみつつんだった。彼は七階に住んでいるから、森長のおばさんを一番よく知っている。

「森長のおばさん、部屋、明かりついてますか！」

六階の共用廊下は明るいままだ。ここが「くらやみ階」だとは思えない。だとすれば、部屋の電灯を消しているのだと推理した。でも、そんなことがあるだろうか。この六階に住む人が全員、揃って明かりを消しているなんて。

「あ、そうそう、買い物行くけど、つけっぱなし。節電しなきゃね」

案の定、森長のおばさんは部屋の明かりをつけているという。それなら、僕らが見た真つ暗な六階はなんだったのだ。森長のおばさんは挨拶を残してエレベーターに乗り込んだが、残された僕らはお互いに無言だった。

「きつと、階数を間違えたんだ」

ようやく、みつつんが口を開いた。そして三人でエレベーターに乗って、今度は七階へ向かった。でも変わらず、ここも廊下に明かりがついている。じゃあ、と五階へ。しかし、ここでも結果は同じだった。

僕らは「くらやみ階」を探して、何度もエレベーターで移動した。それが続いて、三階に来た時に、不意に共用廊下を歩いてくる人物と目が合った。

「あんまり、エレベーターで遊んじゃいけないよ」

その人物は長い黒髪の若い男の人で、服装は黒い帽子に黒いマント。全身が黒尽くめの人。今まで、このマンションで見たことのない人間だった。

「ね、いい子だからさ」

黒尽くめの人は笑顔のまま、僕らをエレベーターへと追い込んだ。フクロは後ずさりをして、いたし、みつつんは何度もエレベーターのボタンを押していた。その時、僕らは同じことを考えていたと思う。

闇人に見つかった！

3.

それから数日、僕らは闇人を見かけるようになっていた。

朝に学校へ行く時もそうだし、夕方に帰ってきた時も見かけた。平日も、休みの日も、あの黒尽くめの男の人はマンションにいた。働いているなら、どこかのタイミングで出かけるはずなのに、その人はずっとマンションの中にいる。

「だから闇人だって？」

ある日の食卓で、僕はつい父親にそのことを話してしまった。いつでもマンションにいる怪人。くらやみの世界に暮らす闇人。そんなことを真剣に語ってみれば、父親は大笑いしてきた。

「あれは米良さんだよ。米良カツキさん。最近、このマンションに越してきたんだ。だから見かけなかっただけだ」

父親は簡単に言うけど、僕はどうしても納得できなかった。夕飯に出された野菜炒めだつて、口にしようと思えなかった。単純に野菜が嫌いなのもあったけど。

「あんまり米良さんに迷惑をかけるなよ」

その言葉も信じられなかった。僕の父親はかなり適当な人で、同じマンションに暮らす人でも、住んでる階が違うと名前を覚えようとしない。それなのに、一階に暮らしているという闇人――米良さんのことはフルネームで覚えている。

奇妙だ、と思いながら野菜炒めに箸をつけた。すると、その瞬間に社会科の課題のことを思い出した。最近「くらやみ階」のことで頭がいっぱいだったけど、発表はもう明後日に迫っている。

「ねえ、この野菜ってどこから来てるの？」

だから、噂話のことはいったん忘れて、野菜についての話を聞こうと思った。

「どこって、ウチはどこと契約してたっけ？」

父親が隣にいる母親に尋ねていた。母親は僕の知らない名前を出して、どこそこのジャガイモが美味しいとか、小松菜の色味がよそと違うとか、色々と言っていた。どうやら我が家もフクロの家と同じく、遠くの農家から取り寄せているのだろう、と思った。

でも、父親は笑って、僕にこんなことを言ってきた。

「ウチの野菜はな、このマンションで出たいらないものから出来てるんだよ」

「いらないものって？」

「大体は生ゴミだな。後は紙ゴミもあるし、なんでもある。とにかくいらないものだ」

不意に、僕は父親の笑顔が恐ろしいもののように見えた。

「お前もいい子でいるんだぞ。いらなくなったら、マンションのダストボックスに捨てて、新鮮な野菜に変えてもらうからな」

思わず手が止まって、箸でつかんでいた野菜が落ちた。

「そういえば、そろそろ米良さんとも契約したいね」

横から母親がそんなことを言い出した。契約の意味はわからなかったけど、たとえば、悪魔との契約みたいな話だとしたら。

「ごちそうさま」

両親はすでに、あの闇人に取り憑かれているのかもしれない。そんな不安がどんどん増えていく。僕は自分の部屋にこもって、ペーパーを使ってチャットを開いた。話し相手はいつもと同じ、みつつんとフクロだ。

ただ、既に事件は起きていたんだ。僕がチャットの画面を開いた直後、みつつんからのメッセージが届いた。

『たすけて。くらやみ階に閉じ込められた!』

4.

僕はフクロと連絡を取って、マンションのエントランスで集合した。

「みつつんが、くらやみ階に閉じ込められたって」

心配そうなフクロを勇気づけながら、僕はチャットでみつつんとやり取りを続ける。

『そこはどこかわかる?』

『わかんない。真っ暗なんだ。変な草がある。異世界の草だよ』

『どうやってそこに入ったの?』

『闇人がいたから、あとを追って、階段をのぼって』

変なところでチャットが止まった。その直後、みつつんから絶望的な言葉が返ってきた。

『充電きれそう』

その言葉を最後に、僕ら二人からの呼びかけにみつつんの既読がつくことはなかった。

「どうしよう、イサ」

「僕らでみつつんを探そう。闇人のあとを追うんだ」

作戦は簡単だった。一階に住んではずの闇人——米良さんを追って、彼が本当に暮らしている「くらやみ階」へと入る。だから僕らは一階の玄関が見える自転車置き場に隠れて、彼が出てくるのを待った。

で、それから数分もしないうちに。

「来た」

フクロが小さく呟いた。見れば、米良さんが玄関を開けて共用廊下へ出てきたところだった。黒尽くめの服は変わらないけど、普段は見えない荷物を手に持っている。

「追おう」

僕らは米良さんを追ったけど、大それた動きなんて何もなかった。米良さんは廊下を突き当たりまで歩くと、普段は入れないゴミ捨て場の門を開け、その奥へ進んでいった。僕とフ

クロは彼に気づかれないよう、少し距離を取って、同じようにゴミ捨て場へと入っていく。  
「あれ、エレベーターだ」

狭いスペースの奥にエレベーターがあった。いつも使っているものとは違って、扉は大きくて、横に広いようだった。近くにゴミを乗せる大型のカートがあるから、これと一緒に入れるようになっていたのだろう、と思った。

「行こう、闇人もこれに乗ったんだ」

そして僕らもエレベーターに乗り込むが、そこで奇妙なことに気づいた。

「イサ、見て！ ボタンが！」

「十三階まで、ある！」

このマンションは十二階建てだ。それなのに一階多い。それなら、答えは一つ。僕は意を決して、六階のボタンを押した。

そして、次にエレベーターの扉が開いた時、そこには真っ暗な空間が広がっていた。

「みつつーん！」

僕らの震え声が「くらやみ階」に響く。ついに来てしまったのだ。帰れないかもしれない。でも、友達を見捨てるわけにはいかない。

僕とフクロは携帯端末の明かりをたよりに、真っ暗な空間を進む。よく観察してみれば、空間の作り自体はマンションの他の階と似ている。ただ個別の部屋はないし、誰かが暮らしている形跡もない。

そんなことを思っていた矢先のことだった。

「何をしているんだ」

背後から声をかけられ、僕とフクロは悲鳴を上げてしまった。振り返ることも出来ない。きつと、米良さんは本性を現して僕らを異世界へと引きずり込むのだ。

「見られたなら、仕方ない」

怯える僕の肩に手が触れた。いよいよかと覚悟し、ゆっくりと後ろを見る。

すると、そこには全身を白い作業服で覆った米良さんと、なんとも呑気な表情で笑っているみつつんがいた。

「よう、二人も来たか！」

歯を見せて笑うみつつんの姿に、僕らは安堵の溜め息を吐いた。

5.

「僕はね、宅地栽培士をやってるんだ」

懐中電灯で通路を照らしながら、米良さんはそんなことを言う。

「宅地、つまり人が住んでるところで、栽培、野菜を育てる専門家なのさ」

はあ、と僕がなんとか事態を飲み込もうとする。みつつんは既に事情を知っているのか、米良さんと並んで暗い廊下を歩いている。

「都市部の野菜っていうのは、大体が栽培工場で作ってるんだけど、その工場とマンションを組み合わせるのが最近の流行りでね、ここもそうした物件だよ」

そう言いつつ米良さんは一つの扉の前に立ち、端末をかざしてロックを解除していた。重そうな扉が開かれると、それまでの暗闇に明るい光が溢れてきた。

「で、このマンションで野菜の栽培を任されてただけど、これはなかなか見せられなくてね」

皆で明るい部屋へと入っていく。天井は低くて、小学生の僕らは平気だったけど、米良さんは少し窮屈そうだった。ただ、それよりも目を引くのが、教室の机みたいに並ぶ大量の白い箱たちだった。

「ここでは、黄ニラを栽培しているんだ」

部屋いっぱいにある白い箱からは、見たこともない野菜が飛び出していた。これがみつつんの言っていた異世界の草の正体なのだろう。

「黄ニラは日光を当てずに育てるからね、窓から太陽の光が入らないようにする必要があったんだよ。それで、君らは『くらやみ階』なんてものを想像したんだ」

僕とフクロがみつつんに視線を向ける。どうやら米良さんに大体のことを話していたらしい。

「でも驚いたな。まさか住んでるのに、このマンション栽培のこと知らなかったなんて。いや、そんなもんか。僕も君らくらいの時には、魚っていうのは切り身のまま海を泳いでると思ってたからね」

そこでみつつんとフクロが二人で笑った。

「そんなわけないじゃん！」

「魚はちゃんと魚だよねえ」

結局、奇妙なものの正体なんてこんなものだ。マンションに暮らす大人や、少し年上の子供でも知っていることで、ただ僕らがそれを知ったのが今だったというだけ。

「はは、ごめんごめん。ウチでは野菜だけど、他のマンションだと肉や魚を作ってるところもあるからさ。ここと似たようなマンションの部屋を使って、培養肉を沢山作っていたり、海産物の養殖してたりもするよ。僕が知ってるところだと、マンションの中で釣りができて、

そのまま魚を食べられるところもあったな」

「なんだそれ、住みてえ！ 肉も食べ放題なの？！」

と、大盛りあがりのみつつん。

「いいよね、でも残念だな、この近くだと肉や魚を作ってる複合マンションはなかったかな。大体は野菜みたいだね」

そうか、と思わず声を出してしまった。

社会科の発表で、肉や魚を調べる班が図書館を使うように言われた理由がわかった。それに、先生が「近くの農家さんに聞きなさい」と言ったのは、この米良さんのような人に話を聞けという意味だったのだ。先生はウチのマンションのことを知っているから、最初から近くに聞く相手がいると思っていたのだ。やっぱりイジワルでも陰謀でもなかった。

「あの、野菜って、マンションで作ってるんですか？」

今となつては「くらやみ階」の謎も解けた。だから、僕は純粹に野菜についての疑問を米良さんに尋ねていた。

「今はね。街に畑がなくなっちゃったのと、遠くから野菜を運ぶのが珍しくなったから、こうして人の住んでる空間の隙間で野菜を作ってるんだ。離れたところから荷物を運ぶとお金もエネルギーもかかっちゃうからね、近い方がいいんだ」

それに、と米良さんは部屋の隅においてあるゴミ収集用カートを指差した。

「マンションの住人が捨てたゴミとかも、畑の肥料になるから、こっちの方が楽なんだ」

「ああ」と頷いた。それと同時に、適当なことを言った父親へのちよつとの怒り。いらぬものの、つまり家から出るゴミが畑の肥料になって野菜になる、というだけの話だった。

「マンションから出るゴミはね、微生物の働きで高速で分解されて、エネルギーになったり、肥料になったりするんだ。これは凄いいよ、マンションごとに住んでる人、つまり一人暮らしの人とか、家族で住んでる人とか、そういった種類が違うから、出てくるゴミも違ってきてね。すると肥料も変わって、出来る野菜も変わるんだ。マンションごとにブランド野菜、個性のある野菜が作られる時代さ」

どうやら米良さんは本当に野菜のことが好きらしい。それから僕らの反応も無視して、いかに美味しい野菜が作れるか実験中だと言ってきた。

「でもまあ、そろそろ完成かな。この黄ニラのブランドが出来たら、皆の家とも契約して、新鮮な野菜を届けられると思うよ」

そうだな、と米良さんが顎に指を当てて少し悩む素振りを見せた。

「ブランド名も決めたよ。『くらやみマンションの黄ニラ』にしようか」

6.

中学生になった今、家から少し離れたスーパーに買い物に行くことがある。

そこは不動産会社と一体型になった店舗で、各地の宅地栽培農家と契約し、マンションブランド野菜を多く取り扱っている。美味しい野菜を気に入ったお客さんが、そのままマンションの入居契約も済ませることもあるらしい。

「意外と売れてんじゃん」

僕は陳列された野菜の中から『くらやみマンションの黄ニラ』を手にとった。生産者の顔として写っているのは米良さんだが、商品のパッケージには三人の子供が笑っている姿が描かれている。そのモデルが誰かは言わずもがな、だ。

「少し恥ずかしいけどね」

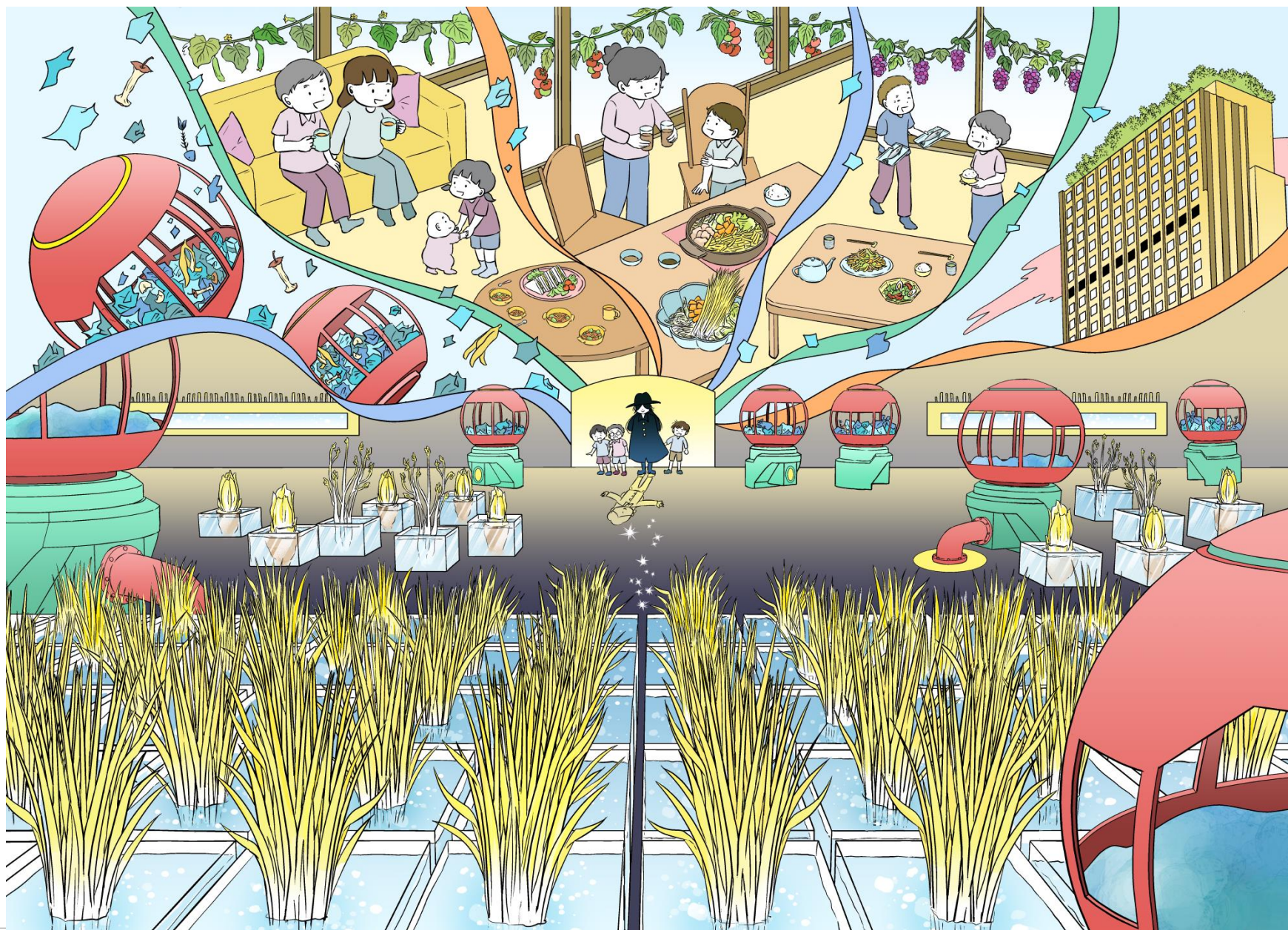
パッケージの裏を見ればコードがあり、それは黄ニラの管理栽培法とマンション住民向けの生活アドバイスを伝えるデータセットにアクセスできる。これを読み取って契約すれば、全国どこでも『くらやみマンションの黄ニラ』が栽培できる。もちろん、その土地ごとに味は変わるけど、この野菜が多く広まるほどに価値は上がっていく。それによって僕らの暮らすマンションの価値も上がるらしいけど、だからといって僕らの恥ずかしい勘違いが広まるのは勘弁だ。

結局、あの小さな事件が僕らに与えた衝撃は大きすぎたようで、社会科の授業での発表はまとまりのない、散々なものになってしまった。それでも、楽しかった思い出はずっと残っているらしく。

「あれ、イサも買い物？」

「おひさー」

声に振り返れば、今でも仲良くしている二人の友達の姿。



## 制作協力

SF小説作家

松崎 有理 柴田 勝家

イラストレーター

Klinika Hamiyama

タスクフォースメンバー（50音順）

木村 恵理子（三菱商事ライフサイエンス）

木村 元紀（株式会社博報堂 UNIVERSITY of CREATIVITY）

倉重 雅彦（株式会社 明治）

高田 幸治（マックスバリュ南東北株式会社）

中島 美樹（ポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社 基盤技術研究所）

能重 正規（オフィスノウジユウ 代表）

野元 知子

真尾 淑子（国立大学法人東京工業大学）

山口 富子（国際基督教大学）

山本 京子（江崎グリコ株式会社 グループ渉外部）

SF思考専門家

宮本 道人 監修（筑波大学 システム情報系 研究員）

大澤 博隆 アドバイザー（筑波大学 システム情報系 助教）

事務局メンバー

高梨 雄貴（農林水産省 大臣官房 政策課）

室木 直樹（農林水産省 大臣官房 政策課）

戸澤 篤（農林水産省 大臣官房 政策課）

藤本 敦也 SFプロトタイプینگ統括（株式会社三菱総合研究所 経営イノベーション本部）

葦津 紗恵 プロジェクトリーダー（株式会社三菱総合研究所 サステナビリティ本部）

山本 奈々絵 プロジェクトメンバー（株式会社三菱総合研究所 経営イノベーション本部）

木村 元則 プロジェクトメンバー（株式会社三菱総合研究所 経営イノベーション本部）

堀留 千恵子 プロジェクトメンバー（株式会社三菱総合研究所 経営イノベーション本部）

木附 誠一 アドバイザー（株式会社三菱総合研究所 営業本部 特命リーダー）